

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 北沢 裕

北沢裕氏の『「死後世界旅行記」の研究——西欧中世からの系譜とその普遍的機能の考察——』は、西欧中世に多く書かれた死後世界に関する幻視や見聞譚を「死後世界旅行記」と捉えて、その内容の変遷を大きな歴史的観点にたつたどり、それを通じて、人間にとって死後世界を何らかの物語としてイメージすることの必然性、およびその今日的意義を、宗教学および死生学的問題枠組みの中で探究した意欲的な論文である。

第一章では、人々の死に対する態度のあり方の変遷と現状を、ゴーラー、アリエス、キューブラー＝ロス等の先駆者の仕事を軸にあとづける。とくに、死に行く人の「自己決定」を重視する現代の状況の問題性を指摘し、死後世界を具体的に想定することの困難が現代人の死の受容を難しくしている点が強調される。この問題意識のもとに、アリエスによって「飼い馴らされた死」の時代として描かれた西欧中世において死後世界がいかにかに想定され、それが死の受容に際してどのように機能していたかが北沢氏自身の視点から再検討される。これが論文の主題となる。死生学と宗教学にまたがる有意義な問題設定といえよう。

第二章では、西欧中世における死後世界イメージの主要構成要素となる、死後世界の「地理」、「往還」、「死者との再会」、「審判」、世界の「終末」といったモチーフの宗教史的源流が、古代中近東から地中海世界の諸宗教伝統の中に手際よく探られる。それらはキリスト教教義形成の素材となったが、教義にはじゅうぶん取り込まれなかったモチーフもさまざまな水路で西欧中世に受容されていたことが、続く第三章において、各種の死後世界歴訪譚や幻視の検討によって示される。初期中世の「フルセウスの幻視」「ドリテルムスの幻視」(7世紀)等から、盛期中世の「アルベリクスの幻視」「聖パトリキウスの煉獄伝」(12世紀)等である。その過程で、死後世界イメージが、聖職者による教導的意図の勝ったものから広義の民衆的想像力が表現されたものへと展開していくことが指摘される。その諸相はケルト文化の異界歴訪譚や教会堂の彫刻、祈祷書の挿画等、図像資料の検討によっても探究され、立論を補強している。中世後期になると、死後世界旅行記はダンテの『神曲』を頂点として終熄し、この時代の死のイメージは往生術文献や「死の舞踏」「腐敗死骸墓像」といった図像によって探られるべきものとされる。そこでは、死後世界の具体的描出よりも、死に至るまでの魂の態度が人々の関心の中心となっていくことに着目される。多様な史料を併用する研究の方法論的困難に挑んで、一貫した問題関心のもとに諸史料を解釈していく手法には一定の説得力がある。第四章では、それまでの検討を踏まえて、いつの時代も実は死は「飼い馴らし」難しいものだったことが主張され、それとともに、現代における死後世界物語の想定可能性が示唆されて、結論となっている。

広い領域を扱う論文であるため、古代の宗教史理解や、中世の諸資料の検討・分析については不十分な点が残るが、今後の研究の精緻化を期待させる独自の見解が随所に提出されており、宗教史研究が現代の死生学の問題に寄与しうる方途を説得的に示し得ている。よって本委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。